【68】

氏　名（国籍）	シオン・アンドレア・シテファナ（ルーマニア）
学位の種類	博　　士（言語学）
学位記番号	博　甲　第　4531　号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**日本語のテレビ・ニュースの研究** －談話の構造と情報の流れを中心に－

主　査	筑波大学教授	博士（言語学）	砂　川　有里子
副　査	筑波大学教授	Ph. D.（言語学）	岡　崎　敏　雄
副　査	筑波大学准教授		杉　本　　武
副　査	筑波大学准教授		橋　本　　修
副　査	筑波大学講師	Ph. D.（認知科学）	宮本エジソン正

論文の内容の要旨

本論文はテレビ・ニュースの談話を情報の流れ・談話構造・結束性といった観点から分析したものである。

テレビ・ニュースの場合，情報伝達はニュースの生成過程における制約や，媒体，及び視聴者の性質などを考慮して様々な条件を満たす必要がある。本論文は，このような談話を，報道論の分野で行われてきた談話分析の手法や情報処理を扱うセンタリング理論を用いて分析し，日本語のテレビ・ニュースの性質を明らかにすることを目的とした論考である。

本論文の構成は以下の通りである。

序　章　研究の目的と方法，及び各章の構成と概要
第 1 章　ニュースとは何か
第 2 章　テレビ・ニュースにおける映像とテロップの役割
第 3 章　ニュース・ストーリーの構造
第 4 章　ニュースのリードの情報構造
第 5 章　テレビ・ニュースの談話の一貫性
第 6 章　ニュースの構造と伝達パターン
終　章　本研究のまとめと展望

序章では，ニュース･メディア研究の現状を簡単に取り上げてから，本論文の目的と意義を述べる。次に，研究の分析対象と方法を取り上げ，論文の全体的な構成を示す。

第 1 章では，分析対象の性質を明らかにするために，ニュースを定義し，次いで欧米や日本のニュースを扱った先行研究に基づき，一般的な特徴について，ニュースの生成過程，ニュース項目の選択基準，ニュースの談話の内容，ニュースを伝えるメディアの違いといった四つの観点から取り上げる。

第 2 章では，日本語のテレビ・ニュースに注目し，伝達に際して同時に使用される音声，映像，テロップという三つの媒体の役割を次の手順で明らかにする。まず映像とテロップに着目し，欧米の研究結果と比較

しながら日本語の資料を分析する。分析の結果から，映像が音声内容と低い相関しか持たないことを明らかにし，映像は少なくとも音声内容の理解・明確化にとって重要な役割を果たさないことを主張する。次いでテロップが音声内容を繰り返したり，談話の重要点を明確にしたりしていることを明らかにし，テロップはニュース全体の理解を支える役割を果たしていると主張する。最後に音声媒体に着目し，音声伝達が映像やテロップによって影響を受けるか否かを確認するために，ラジオ･ニュースと比較する。その結果，テレビ･ニュースの情報伝達における主な媒体は音声であり，映像などとの共存によって基本的にその内容が影響を受けないことを明らかにする。第２章の結果に基づき，第３章以降はテレビ・ニュースの音声内容に対象を絞って考察する。

第３章では，テレビ・ニュースのマクロレベルの構造に注目し，そのパターンを明らかにする。まず欧米のニュースの構造を対象とした代表的な先行研究を取り上げ，談話のマクロ構造の特徴を述べ，談話を構成する内容部分（「内容カテゴリー」）とその分類を説明する。次にテレビ・ニュースの資料に注目し，新聞記事と比較しながら構造的な特徴を明確にする。分析の結果に基づき従来主張されてきた内容カテゴリーの分類を再考し，日本語のニュースにおけるより妥当な分類を提案する。また，日本語のテレビと新聞のそれぞれについて，内容カテゴリーが一般的に提供される順序に基づき，ニュース項目の一般的なマクロ構造を提示する。

第４章では，ニュースの理解に重要な役割を果たしているとされる冒頭部分（「リード」）のみを対象とし，談話の情報構造を認知的な観点から扱った先行研究に基づき，情報の提示に使用される言語手段及び情報処理に関与する認知的プロセスを明らかにする。本章で特に注目するのは，主格名詞句の指示対象の特徴及びそれに対応する言語手段の条件，リードで現れる出来事のタイプ，新しい情報の文脈化・連結の仕方の三点である。前章と同様，新聞記事の資料と比較し，その特徴を記述する。

第５章では，ニュースの冒頭部分に限らずニュース談話全体を扱い，談話の一貫性の程度及びその特徴を情報処理を扱うセンタリング理論に準拠して探求する。まず，談話内で起こる「注意の中心」の移行の仕方を考察し，移行の各タイプとその頻度，及び様々な連続パターンの頻度を観察することを通じてニュースの結束性について考察する。次に内容の変化の局面に着目し，内容カテゴリーの変化によって談話全体の一貫性に影響が及ぶか否かを探る。分析方法として，「注意の中心」の移行の特徴を「内容カテゴリー」の概念と連結させ，各ニュース項目におけるカテゴリーの変化と「注意の中心」の移行のタイプとの関連性を記述する。第３・４章と同様，新聞記事も考察し比較する。

第６章では，ニュースの談話で頻繁に用いられる表現に注目し，ニュースの伝達におけるパターン化の現象に着目する。分析方法として，ニュースの「内容カテゴリー」の構造と伝達に用いられる言語手段という二つの側面を関連づけつつ分析を行い，ニュースとしてよく扱われる話題を分類し，各タイプにおける情報伝達のパターンを明らかにする。分析の結果に基づき，次の二点を主張する。①ネガティブな内容を伝えるニュースは情報伝達の仕方において明らかなパターンを持っているが，ポジティブな内容を伝えるニュースでは，特定のパターンは見出せない。②テレビと新聞のニュースにおける情報伝達の仕方は非常に類似しているが，それぞれの媒体の性質によると考えられる情報量の異なりや情報の繰り返しの頻度の違いといった特徴も見られる。

終章では，分析の結果をまとめ，残された課題を述べる。またテレビ・ニュースの談話における結論を提示すると共に，談話分析の研究分野における本論文の位置づけと研究の展望について述べる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

現代社会においてテレビ・ニュースは最も有力な情報メディアになりつつあるが，テレビ・ニュースの談

話研究は立ち後れている。ニュースを談話分析の観点から扱った研究の多くは新聞記事を対象としているだけでなく，その研究対象もマクロ構造の分析や特定の文法形式の用法といった個別の領域に留まっている。本論文は，テレビ・ニュースを新聞やラジオのニュースと比較し，そのマクロ構造のみならず，ミクロレベルの情報伝達や結束性のあり方を記述することにより，包括的・総合的なテレビ・ニュース研究を試みたという点で，意欲的かつ先駆的な研究である。

本論文は，情報を迅速にわかりやすく報道しなければならないニュースの特質として様々なレベルで談話がパターン化されていることを，数多くの事例分析を通じて明らかにしている。まず，ニュース談話のマクロ構造のレベルにおいて，ニュース談話はいくつかの内容カテゴリーによって構成され，これらのカテゴリーが一定のパターンによって配列されることによってニュース独特のストーリー構造を形作っていることを明らかにした。さらに，扱う話題に応じて，ニュースの内容構造がパターン化されるものであること，特に，ネガティブな話題を伝えるニュースの場合は常套化した内容カテゴリーの構造のみならず，特定の言語表現のパターンが見られることを明らかにした。一方，ニュースの概要を伝えるリード部分においても，常に文脈化が行われており，旧から新へという情報の流れに沿って談話がパターン化されているものであることを明らかにした。

ニュースの談話のパターンをこれほど包括的に，また，詳細に記述した研究は他に例を見ず，ニュースの談話研究を進める上で数多くの重要な知見を提供している。さらに，記述的な立場を貫いた本論文の詳細な分析は，ニュース以外のジャンルの談話研究を進める上でも比較資料としての重要な価値を有している。

一方，第2章で，映像とテロップが音声内容の理解に大きな影響を与えるものではないことを論じ，それ以降での考察の対象から映像とテロップを除外した。しかしながら，テロップはともかく，映像のほうは音声内容が与える以上の情報を提供し，音声情報と共にテレビ・ニュースの情報伝達に貢献していることは間違いない。この点についての議論は本論文では扱われず，今後の課題として残されている。また，ここで扱われたテレビ・ニュースのデータがNHKニュースに限定されていたという点についても，民放局のデータを加えるなどして本論文の妥当性をさらに検討する作業が必要である。これら残された課題はあるものの，本論文がテレビ・ニュースの先駆的な研究であることに変わりはない。

本論文で示された成果は談話分析のみならず，メディア研究においても重要な位置を占めるものであり，今後の談話分析・メディア研究に大きく貢献するものである。

よって，著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。